

第96回二松學舎大学人文学会大会講演題目・研究発表要旨

日時 平成十九年十一月十七日（土）
場所 柏校舎本館五〇一教室

講演

三國志の世界

大東文化大学文学部中国学科教授 渡邊義浩先生

研究発表

《国文学》

霧と垣間見

——『堤中納言物語』「貝合」——

博士前期課程一年 高橋佑佳

霧や霞という気象上同一の現象は、平安時代の韻文においては春と秋の季節によって分類されていた。そしてそれぞれ季節や場所だけではない「悲しみ」、「嘆き」、「隔て」などの意味やイメージを付随させ、歌ことばとしての霧と霞が出来上がる。

『源氏物語』に至ると、その和歌的イメージを取り入れた景情一致の手法がとられ、また物語進行上必要な装置として霧や霞が描かれ

ていく。特に物語で恋愛発生装置として使用される垣間見表現と気象状況は密接に関係していると考え、霧のたちこめる中での垣間見と霞の漂う中での垣間見とを比較検討することで、本発表では平安末期成立の『堤中納言物語』「貝合」では物語を進行する上で霧をどのように使用しているのかについて取り扱いたい。「貝合」において直接的に霧を表現する語句は非常に少ないが、物語構成と霧は大きく関わっており、「貝合」という短編を作り上げるために重要な機能を果たしている。

太宰治「燈籠」について

博士後期課程三年 佐々木 義 登

「燈籠」は『若草』第十三巻十号（宝文館 昭和十二年十月）の創作欄に発表された。「満願」と並んで太宰の前期から中期への移行期に発表された作品として知られている。しかし本文の読解を軸とした研究はいまだ十分とはいえない。今回本作品に光を当てることで中期への移行期にある太宰文学の一端をひもときたい。

女性一人称独白体として「燈籠」は始めて世に出された作品であったことを前提に冒頭部分に注目する。前期太宰の硬派で、ペダ